遠藤周作「白い人」論：その時間設定と主題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 葵 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4720

遠藤周作「白い人」論

―その時間設定と主題―

田中　葵

一　「白い人」の発表と同時代評

遠藤周作の中編小説「白い人」は、「アデンまで」（「三田文学」昭和二十九年十一月号）、「学生」（「近代文学」昭和三十年四月号）に続く、第三作目の小説である。「白い人」は全九章から構成されており、「近代文学」昭和三十年五月号に、そのⅠ章からⅥ章までを、六月号にⅦ章からⅨ章までが、一回に分けて発表された。その後、昭和三十年度上半期芥川賞（第三十三回）を受賞し、「文芸春秋」同年の九月号に再掲載された。その際、「白い人」の表題に附されてあった〈ユーロッペアン〉というルビが省かれた。また、作品の初出末尾に書かれてあった、〈「白い人、黄色い人」の内より〉という言葉も削除されている。ここの末尾の言葉により、遠藤周作が、「白い人」を発表した時には、既に「黄色い人」を構想していたか、あるいは、書き上げていたと思われる。さらに、「近代文学」から「文芸春秋」に再掲載された時にかなりの改稿が施されているが、この改稿のことについては、二章で詳しく触れることにする。

その後、「白い人」は、『白い人・黄色い人』（昭和三十年十二月二十日、講談社）に収録された。[注1]

発表当時、「白い人」は、ほとんど文芸時評などでは取り上げられていなかった。奥野健男が、「文芸時評」（「図書新聞」昭和三十年六月四日）で、

> 紙数が尽きたが、文学エネルギーのあふれたものとして、（中略）遠藤周作の『白い人・黄色い人』（何れも『近代文学』連載）に注目したい。

と、述べているだけである。だが、奥野健男はまだ発表されていない「黄色い人」が「白い人」に続いて、「近代文学」に掲載されると期待したのである。しかし「白い人」については、〈紙数が尽きた〉と言って、その内容については、一行の批評もしていない。

遠藤周作は、「白い人」を発表する経過について、「出世作のころ」（「読売新聞」昭和四十三年二月五日～十三日）で次のように

述べている。

その小説と同時に、私は『白い人』という中編にとりかかっていた。大学ノートに書いては直し、書いては直したこの小説は午後になるとだるくなる当時の私にはなかなか進まなかった。それをやっと完成して「三田文学」にもっていったが、編集部はまだ未熟だといって掲載を断ってきた。そこで私は、「群像」の大久保房男氏に読んでもらい、さらに書きなおして「近代文学」に掲載してもらった。

この引用の冒頭にある、〈その小説〉とは前述した「アデンまで」のことである。

遠藤にとっての処女作、「アデンまで」は、あまり評価が良くなかったようである。遠藤は、同じく、「出世作のころ」で、

生まれてはじめて書いた小説だったが、佐藤朔先生にみていただき、その推挙で「三田文学」に掲載された。

だが、合評会の日、私のこの小説は一人の先輩にボロ糞にやっつけられた。

と述べている。また、村松剛は、「芥川賞の遠藤周作」（「三田文学」昭和三十年十月号）で、

二十九年の十一月、小説としての処女作「アデンまで」が「三田文学」に発表された。合評会での評判はよくなかった。西洋と日本との思考方法上の対立、と彼は主題を説明したが、それを恋愛という形で書いたために、ただの人種劣等感に書けてしまった。そう僕は考えた。のみならず、リアリズムとしての書きこみ方も足りない。・・・・・・いろいろ悪口を言われて、

遠藤は不平満々だった。（中略）一方彼は、「白い人」を一年かかって書いていた。

と、述べている。〈処方作〉といわれている「アデンまで」が酷評されていて、「白い人」の執筆には、かなり力が入っていたようである。

「白い人」芥川賞受賞について、遠藤周作自身も、先の「出世作のころ」で、〈自分が芥川賞をあの作品でもらえるとは夢にも考えていなかった〉と述べている。「白い人」は芥川賞を受賞して文壇で話題となり、[注2]「文芸春秋」再掲載の時に、文芸時評などで取り上げられた。窪田啓作が、その時の受賞について〈毀誉褒貶の問題作〉（「図書新聞」昭和三十一年一月二十八日）と言ったように、当時の評価は賛否両論であった。

芥川賞選評では石川達三や井上靖、佐藤春夫、滝井孝作などは、「白い人」を受賞作として推している。特に、石川達三は、

遠藤周作は全く未知の人だが私はこの作品を信用してもいいと思う。戦後のフランス文学などに類型がありはしないかという疑問も提出されたが、古臭い類型ならともかく、新しい類型ならば外国にその例があってもなくとも委員会はあまり気にしなくともいいと私は思った。

と述べている。また、石川達三は、〈発表と同時に某新聞が芥川賞では食えないとか、当選の価値が下落したとか嫌味な記事をのせていた〉と書き、これは昭和三十年七月二十一日の「毎日新聞」の「片

手に安全な職業」という匿名で書かれた記事のことであろうが、[注3]それに関しても〈新聞社のこういう記事を下劣だと思う〉と非難している。佐藤春夫は、〈石川達三が「白い人」をよく評価しているので僕もこれを採りたいと思いはじめた。〉と、石川達三が推していることにより、それに影響されたようである。井上靖は、〈歴史的時期に一人の神学生と異常性欲の主人公の対立を主題とし、結構相整った野心的な作品であった〉と言い、滝井孝作は、〈西洋小説のようなものも日本人が描けるのだという意味で面白いと思った〉と述べた。また、佐藤春夫は〈今までに見ない作風〉といって評価している。それに対して宇野浩二は、〈この小説は芥川賞に該当しない、と、ここで言明する。〉と、強く否定していた。また、匿名が、「新潮雑談」（「新潮」昭和三十年九月号）で皮肉って、〈一種の敵は本能寺的な意で推せんしているのは石川達三だ〉とさえ言う始末である。さらに、平野謙が、「疲れている作家たち」（「毎日新聞」昭和三十年八月三十一日）で、

ただ、フランス人とか日本人とかに関係なく、スパイになった主人公の内面心理の描写がまだ弱い。これは「白い人」だけの問題じゃないが、スパイが作中人物として登場してくる作品がずいぶん多くなったね。

と、作品の根本的な問題について疑問を呈している。しかし、外国が舞台というその新しさが注目されているだけで、作品そのものの文学的評価をした批評はないに等しい。

また、青野季吉が、（「朝日新聞」昭和三十年七月二十六日）で、

この芥川賞作品は、フランスの一青年を設定し、世界戦争を舞台として、精神と肉体、神と悪魔の格闘を主題としている。こういう問題はヨーロッパ文学で久しく読まれてきたものだが、こんな形で日本文学に移されたのは、これがはじめてだといえよう。

と述べている。また、匿名が、「芥川賞を受けた遠藤周作」（「図書新聞」昭和三十年七月三十日）で、

観念的なものを毛頭から毛ぎらいするこの国の風土のなかで、このような作家の登場は期待されていい。「白い人」はまだかなり拙い。異色という点で、それが補われているのだ。

とも言っている。このように、作品は拙いが、日本人が西洋人を描いた点、異色という目新しさがあるという点で注目されていたのである。

二　「白い人」の改稿と作品展開における年代の矛盾

「白い人」（ユーロッペアン）は、「文芸春秋」に掲載されて後、単行本『白い人・黄色い人』（昭和三十年十二月二十日、講談社）に収録された。しかし、それ以前、「近代文学」から「文芸春秋」に再掲載された時に、大きな改稿が見られる。その後は、「文芸春秋」に掲載されたものが、ほとんど定着している。異同の大部分は、本文の削除であり、それは、作中人物〈私〉の心理や価値観を描いた部分に多くみ

られる。「文芸春秋」に再掲載された分では、大きな改稿がなされているにも拘らず、それを取り扱った論文は笠井秋生のものしかない。さらに笠井秋生は、『遠藤周作論』（昭和六十二年十一月二十五日、双文社出版）で、

『白い人』は短編集『白い人・黄色い人』（講談社、昭30・12）に収録された際、表題の〈ユーロッペアン〉が取り除かれたほか、四百字詰原稿用紙約十四枚程度の削除を主とする改稿がなされた。しかし、内容上の異同はなく、主人公〈私〉の手記という体裁をとりつつ以下のように展開する。

と述べている。笠井秋生は、「白い人」が短編集に収録された際に、表題のルビが取り除かれ、改稿がなされたと指摘しているが、それは誤りである。単行本は少しの異同はあるが、笠井秋生の言うような〈四百字詰原稿用紙約十四枚程の削除を主とする改稿〉といった、大きい根本的な異同はない。「白い人」の大きな改稿は、単行本ではなく、「近代文学」から「文芸春秋」に再掲載された時になされたものである。なぜ遠藤は、初出「近代文学」から芥川賞受賞作として再掲載された「文芸春秋」で、大幅な改稿を試みたのか。作品の不十分さを補うために改稿したのであろうが、改稿を経た上でも、「白い人」は、なお多くの瑕瑾を有している。そこで第一に注目したいのは、「白い人」の作品内における時間設定である。「白い人」は、次の書き出しで始まる。

一九四二年、一月二十八日、この記録をしたためておく。連合軍はすでにヴァランスに迫っているから、早くて明日か明後日にはリヨン市に到着するだろう。敗北が、もう決定的であることは、ナチ自身が一番よく知っている。

このように冒頭から時代がはっきりと設定されており、それ以下、作品は、〈私〉の〈記録〉で、過去を回想する形で展開されていく。作品は、〈この記録をしたためておく〉という手記の日付が〈一九四二年一月二十八日〉となっているので、作品の出来事は、全てそれ以前に起こったことである。〈私〉は、この〈記録〉を残す理由として、Ⅰ章の最後で、

私は逃げねばならぬ。第一、歴史が、この私を、いや私の裡の拷問者を地上から消すことは絶対にできないのだ。その事実を私はこの記録にしたためたいのである。

と、語っている。この〈記録〉をしたためておくのは、〈私の裡の拷問者を地上から消すことは絶対にできない〉という〈事実〉を記録したいためである。〈私の裡の拷問者〉とは、〈人間の他者に対する姿勢〉であり、それは、人間が誰しも持っている他者を虐げる欲望である。

「白い人」の作品舞台は、一九三〇年代から一九四二年一月二十八日までの第二次世界大戦中のフランス、リヨンの街である。物語のあらすじを簡単に次に述べておく。

フランス人の父とドイツ人の母を持つ〈私〉は、生まれつき斜視で、容貌が醜い。〈私〉は、小さい頃に、容貌の醜さをはっきりと宣言した父を憎んでいた。父には放蕩癖があり、〈白いブヨブヨした肉体〉は、〈私〉に、〈十八世紀の卑俗な放蕩児〉を想起させるも

のであった。父とは逆に、母は、厳しい清教徒だった。しかし〈私〉は無神論者であった。それは、〈父の教育のため〉ではなく、〈清教徒である母への反抗から始まった〉と言ったほうが正しかった。母は〈私〉に厳しい禁欲主義を押し付けたが、〈私〉の情欲の喜びは、十二歳の春、女中イボンヌの犬を虐待する光景を見ることで、虐待の快楽を伴って、開花した。その後、〈私〉は、他者を虐げることに快感を覚えるようになった。〈私〉は、そのことを秘密として、自分の中にひっそりと隠し持っていた。その後、〈私〉は大学に入学し、そこでジャック・モンジュという神学生に出会う。自分の容貌の醜さに酔っているジャックの姿を基督と重ね、〈私〉はジャックを憎む。〈私〉は、ジャックが愛している女性、マリー・テレーズを舞踏会に誘う。それは、戦争中に舞踏会に行くことを〈悪〉とする、ジャックに対しての嫌がらせであった。そのうちドイツ軍は、ポーランド進撃をはじめ、その戦禍はフランスにも及ぶ。〈私〉は、フランスを侵略したドイツ軍の秘密警察の片割れとなる。そして、当時、抗独運動をしていたジャックを捕らえ、拷問する。どんな拷問にも屈しないジャックに腹を立てた〈私〉は、マリー・テレーズを捕らえ、凌辱する。だが、ジャックは結局、口を割らずに舌を噛んで自殺してしまう。

「白い人」は、異常な性癖の持ち主である〈私〉、熱心な神学生であるジャック、そしてそのジャックが愛する従妹のマリー・テレーズ、と容貌が醜いという共通点を持った三人を軸とし、第二次世界大戦を背景に展開される。

「白い人」は、冒頭の日付から始まり、作品全体を通して、出来事がある度に、日付が附されている。それは、読者にリアリティを持たせる効果がある。しかし、明確に日付が表記されていることで、歴史的事実、作品の流れに矛盾が生じている箇所がある。小説はフィクションであるのだから、歴史的事実と反していてもいいではないか、という意見も出るかもしれないが、「白い人」においては、この第二次世界大戦という特殊な状況下が背景になければ作品世界は成立しないのである。歴史的出来事を、作品の中で日付を附して書いてある箇所は、Ⅰ章の冒頭の〈一九四二年一月二十八日〉のナチスの敗北の決定、Ⅱ章の一九三九年のポーランド進撃、Ⅶ章の一九四〇年、五月十日のドイツ軍のオランダ・ベルギーの国境の突破、六月四日のパリ最初の爆撃、六月二十五日のパリ陥落、の五箇所である。

〉まず、冒頭の日付であるが、遠藤は〈私〉に〈一九四二年一月二十八日〉にナチスの〈敗北が決定的である〉と語らせている。史実では、ドイツ軍の勢力が下火になっていくのは、一九四三年のスターリングラートの戦いからで、一九四二年の時点では、ドイツ軍はまだ優勢である。ドイツ軍が本格的に勢力を失うのは、一九四四年六月六日のノルマンディー上陸作戦で、パリが解放されたのが、一九四四年八月二十五日である。また、リヨンに連合軍が到着したのも、一九四四年の六月から十二月の間ということになっている。どちらにせよ、一九四二年の間は、ドイツ軍はまだ優勢で、「白い人」の冒頭にあるように、ドイツの敗北が決定的であるはずはない。他

の四箇所については、史実に基づいて書かれているのに、冒頭の日付だけが史実に反している。これは、史実に基づくと、一九四四年の状況である。このように遠藤は、冒頭から歴史的認識を誤っている。ナチスの〈敗北〉が決定的であることが、〈私〉にこの〈記録〉を書かせるのであり、逃げなければならない状況になければ、〈私〉は、〈裡の拷問者〉を地上から絶対に消すことができないということを、この〈記録〉にしたためることもないのである。つまり、ナチスの〈敗北〉なしでは、作品自体が成り立たなくなる。遠藤は、そのような作品の核となる日付を、冒頭から歴史的に誤っている。さらに、こういった時間設定の齟齬は、冒頭だけではない。遠藤は、作品の構成上においても、時間設定の齟齬を作ってしまっている。

「白い人」の出来事と日付を、〈私〉を中心に章ごとに追って行くと、次の表のようになる。

「白い人」作品内における出来事

章	日付	出来事
Ⅰ	一九四二年　一月二十八日	記録を書く（現在。以降、〈私〉の記録で過去の遡る。）
	一九三〇年代	イボンヌが犬を虐待しているところを目撃
Ⅱ	一九三七年　八月中旬	アラビアのアデンに旅行して、曲芸の娘と少年を見る 虐待の快楽を伴って肉欲が目覚める 少年にお金を渡して虐待？
	一九三八年　夏	父親死亡
	秋	大学入学試験―合格
	一九三九年（〈その翌年〉と表記）	ポーランド進撃
Ⅲ	一九三八年　八月下旬	クロードベルナール街の大学に出掛ける（九月から入学予定） マリー・テレーズとモニックをガラス越しに覗く マリー・テレーズたちが置いていった下着を引き裂く（マリー・テレーズとモニックの話をジャックも立ち聞きしていた。）
Ⅳ	一九三八年　十月二日	大学で入学式 午後からパーティーがあり、再びジャックと顔を合わせる
Ⅴ	一九三八年　十月五日	大学の最初の講義 学校の教室でマリー・テレーズとモニックを見かける マリー・テレーズを待ち伏せし、バスで舞踏会に誘う
Ⅵ	十月末（〈その月の終わり〉と表記？）	舞踏会 マリー・テレーズに酒を飲ませて酔わせる（それを知ったジャックは怒る）
	十月末か十一月初頭（舞踏会の〈翌日〉と表記？）	大学は夏休みに入る（〈私〉は母の療養についてコンブルウに行く）
Ⅶ	九月一日	ドイツ軍、ポーランドへ侵入
	十月一日	夏休みが終わる
	一九四〇年　二月	母死亡
	五月十日	（マリー・テレーズを追いかけたのは〈一年前の五月〉と表記？）→舞踏会は一九三九年の五月ということになる。[9]
	六月四日	ナチ軍はオランダとベルギーの国境を突破
	六月二十五日	パリは最初の爆撃を受ける
	十月下旬	パリ陥落
Ⅷ	一九四一年　一月	独逸秘密警察に採用される
	一月、二月	松の実町で、初めて独逸秘密警察の拷問を目撃する 松の実町に滞在
	（〈三年前〉と表記？）→（〈二年前〉と表記）→	抗独運動をしていたジャックが捕らえられる 〈ジャックと初めて出会う〉→一九三八年〉 〈舞踏会〉→一九三九年〉
Ⅸ		ジャックに口を割らせるために、マリー・テレーズを凌辱する ジャックが自殺する

〈私〉の回想は、一九三〇年代から始まり、年代が明確に表示されているのは、〈私〉が大学へ入学する一年前の一九三七年からである。「白い人」の中での出来事を追いながら、年代を確認すると、九章ある内で、日付を明確にしていない章が二章ある。それは、Ⅵ章とⅨ章である。Ⅳ章にあるとおり、〈私〉が、クロード・ベルナール街の法科大学で、マリー・テレーズ、モニックを目撃し、初めてジャックと出会い、話をしたのが一九三八年の八月である。Ⅲ章では、この大学に九月から進学予定と書かれているが、Ⅴ章では、十月二日に入学式と書かれている。ここでも遠藤は誤りを犯している。その後、十月五日に最初の講義があり、〈その月の終わり〉[注4]、つまり、十月の末に舞踏会がある。この時点では、入学した年と同じなので、まだ一九三八年のはずである。Ⅵ章は、舞踏会のことが描かれている章であるが、この章には、前述したとおり日付が附されていない。舞踏会の後、〈翌日からは夏休みだったのだ。・・・・・・〉とある。そして、Ⅶ章では、〈私〉は、母の療養についてサボアのコンブルウに出掛ける。作品の流れどおりに読むと、十月末、または、十一月から夏休みに入ることになってしまう。ヨーロッパの大学は、大学によって多少の誤差はあるが、夏休みが始まるのは、日本と同じく七月頃である。さらにⅦ章で〈九月になった〉とあり、〈九月一日の未明、ドイツ軍は潮の如くポーランドに侵入を開始した・・・・・・〉とある。史実に基づくと、この時点ではもう、一九三九年になっている。ということは、〈私〉は、一年近くコンブルウに滞在していたことになる。また、同じくⅦ章で、時は一九四〇年に移り、二月に〈私〉の母が脳溢血で死亡する。その後、〈一年前の五月、私はマリーテレーズをここに追いかけた。〉とある。これは、〈私〉がマリー・テレーズを舞踏会に誘うためである。つまり、舞踏会があったのを、一九三九年の五月と設定しているわけである。それなら、辻褄が合うが、作品をそのまま読むと、年代の流れに一年という大きな誤差が出来ている。これは、日付を附さない章を作ったり、〈～年前〉などと、曖昧な日付の設定をしたために、生じてしまった矛盾である。

つまり、遠藤周作は、「文芸春秋」に再掲載する際に改稿した時、作品の時代設定までの矛盾を訂正するだけの意識が廻らなかったのである。この時期の遠藤周作は、作品を書き上げることが精一杯で、文章上の修辞や作品全体の構成を練り直す余裕がなかったのであろう。因って、冒頭の日付も、意識的に設定したわけではなく、一九三九年のポーランド進撃を皮切りに、第二次世界大戦を作品の背景とし、一九四〇年に〈私〉が独逸秘密警察の片割れとなり、一九四一年にジャックを拷問し、その次の年、つまり一九四二年に〈私〉が〈記録〉を書く、といった設定にしてしまったのである。

三　「白い人」の主題

「白い人」の主な登場人物は、〈私〉とジャックと、ジャックの愛するマリー・テレーズである。〈私〉は〈みにくい子〉で、〈生まれつき斜視〉であった。また、ジャックは、〈ひどく痩せて〉おり、

〈はげ上っ〉た〈頭の上には、〉〈あわれな赤毛が残っていた〉。この男は、斜視である〈私〉よりも〈兎口の男〉よりも醜かった。マリー・テレーズは、〈お世辞にも綺麗とは〉言えず、〈ソバカスだらけの娘〉である。このように、三人は、容貌が醜いという共通点を持つ。〈私〉は醜いことで異性に興味を示さず、情欲の喜びは〈虐待の快楽を伴って開花〉し、それ以後、〈私〉は他者を虐げることで快感を覚えるという、異常な性癖を持つに至った。一方、ジャックは、容貌の醜さを〈十字架〉として自ら背負い、自分の信仰のみならず、〈たとえ、君が神を問題にしなくても、神は君をいつも問題にされているのだから・・・・・・〉と〈私〉にも信仰を強要した。大学の講義が始まると、〈表紙の裏には、〉〈私の名〉と〈聖ヨハネ福音書からとった句〉とが書きつけてある、宗教関係の本を〈私〉の机の上に置いた。〈私〉は、それをジャックの〈攻撃〉と解釈している。〈私〉とジャックは容貌が醜いという点では共通しているが、無心論者の〈私〉に対して、ジャックは熱心な神学生である。二人は、信仰に関しては全く正反対であった。また、ジャックは、マリー・テレーズには〈ユダヤ人たちが独逸で血をながしている時〉、〈舞踏会を学生が開くのは不謹慎〉と舞踏会に行くことさえも禁止した。マリー・テレーズはジャックの従妹であり、子供のころ両親をなくした彼女は、ジャックの家にひきとってもらっていた。マリー・テレーズは、大学に行けるのもジャックのおかげだと言う。

さて、問題となるのは作品のクライマックスで、そこまで熱心な神学生であるジャックが自殺をしてしまうことである。抗独運動をしていたジャックは、独逸秘密警察に捕らえられ、拷問される。どんな肉体的苦痛にも屈しないジャックの口を割らせるため、独逸秘密警察の片割れとなっていた〈私〉は、マリー・テレーズを捕らえた。ジャックはこの時、同じく抗独運動をしていた同志かマリー・テレーズのどちらかを裏切らなければならない状況に置かれることとなる。しかし、ジャックはキリスト教で〈大罪〉とされる自殺をもって、この苦渋から逃れた。これは、神を裏切る行為であり、敬虔なクリスチャンであるジャックがとる行動として、とても不可解なものである。このジャックの自殺に関しては、今日まである程度共通した解釈がなされている。

まず、武田友寿が、〈同志への信義を貫くため〉と述べ、[注5] 笠井秋生が〈マリー・テレーズと同志を守るため〉と解説している。[注6] また、宮坂覺は、〈神学生のジャックは、マリーを救うため自ら命を絶ったのである〉と語り、[注7] 下野孝文は、〈同志を裏切ることなく、マリー・テレーズを守ろうとすれば、いずれにしてもその命を犠牲にする以外に方法はない。そのためにジャックは自殺という大罪をおかした。〉と述べている。[注8]

しかし、ジャックの自殺は、本当に同志やマリー・テレーズを守るためのものであったのだろうか。それには疑問が残る。なぜなら、どんな肉体的苦痛にも口を割らなかったのだから、同志を救いたいのならば今までどおり拷問に耐え、黙っていればいいことである。それなのに〈私〉がマリー・テレーズを捕らえたことでジャックは

豹変する。しかし、ジャックが自殺する時には、もう既にマリー・テレーズは〈私〉の手によって汚されている。ジャックは自殺をもってしてもマリー・テレーズを救えなかったのである。それならばジャックの自殺には、どういう意味が隠されているのか。ジャックの自殺の意味を大きく左右するものとして、削除された本文を取り上げたい。改稿のほとんどは本文の削除であり、大きなものは、Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ章に見受けられる。その中で問題にしたいのは、Ⅶ章の削除された本文である。Ⅶ章は、「近代文学」で（下）の最初の部分にあたる。Ⅶ章の冒頭は、舞踏会が終わった夜のことが書かれているが、およそ七百字が削除されている。その中に注目したいところがある。

私はあの夜、マリー・テレーズとジャックがどうなったかを知らない。ジャックはおそらく、この罪に陥ちた？　子羊を起し、だきかかえて自宅まで送り届けたのだろう。私には関係がない。

と書かれているところである。〈私〉は、マリー・テレーズに、舞踏会に行くことをジャックに黙っているようにと、嘘をつかせた。舞踏会の夜、〈私〉はマリー・テレーズを酔わせ、庭園に置き去りにし、そのことをジャックに告げた。ジャックはその事実を知って〈「悪魔！」〉と激怒する。ジャックはそのような精神状態で、泥酔しているマリー・テレーズを連れて帰ったことになる。さらに、前述した通り、マリー・テレーズは幼いころ両親が死んでから、従兄であるジャックの家に引き取られていたから、〈自宅〉とは、ジャックとマリー・テレーズが同居している家になる。[注9]「近代文学」以後、削除されているこの本文の中に、〈ジャックはおそらくこの罪に陥ちた？〉とある。〈あの夜〉とは舞踏会の夜、つまり、ジャックが泥酔したマリー・テレーズを連れて帰り、意識のないマリー・テレーズを犯した夜のことを指し、〈この罪〉とは、まぎれもない肉欲の罪である。「近代文学」では、この本文があることにより、マリー・テレーズとジャックが、この舞踏会の夜に肉欲の罪を犯したのではないかと推測できる。もし、舞踏会の夜にジャックがマリー・テレーズと肉欲の罪を犯していたならば、ジャックは、その時点で神を裏切ったことになる。内面ではカトリックの教えに反するところを持ちながら、表面上では、今までどおりに、熱心に神学生を演じていたとも考えられるのである。さらに、これは「近代文学」から定着している本文だが、次に〈私〉がジャックとマリー・テレーズを見たときの描写は次のようである。

女は痩せていた。女学校の老嬢教師でも着るようなダブダブの黒服を着て、黒靴下をはいていた。両拳を顔にあてて、歯をくいしばっていた。それなのに、ジャックはその傍で昔のとおり腕をくみ、眼をとじたまま、たっている。はげ上がった頭にあわれな赤毛が汗で光り、顔をうごかすたびに寄進台の燭台の炎影が、その縁なし眼鏡が、キラッ、キラッと光るのも同じだった。

私にはなぜ、マリー・テレーズだけがこのように変ったか、わからなかった。

ジャックは以前と変わらない様子なのに、マリー・テレーズだけが変わっていたのである。この本文からも、舞踏会の夜に何か起こった事が分かる。ジャックはマリー・テレーズに、自分たちが犯した肉欲の罪を隠すために、わざとそのような格好をさせていたのではないか。つまり、カモフラージュということである。もし、このように舞踏会の夜にジャックが〈罪〉に〈陥ち〉、マリー・テレーズが既に〈純潔〉ではなくて二人ともそれを〈秘密〉として内に秘めているという仮説を立てたら、ジャックの自殺の意味はこう考えられる。マリー・テレーズが〈私〉に凌辱されたら、彼女が〈純潔〉でないということが分かってしまう。つまり、ジャックが自分の性欲に負け、キリストを裏切り、〈罪〉を犯したという事を〈私〉に知られてしまうのである。それは、信仰だけを信念として生きてきたジャックにとって、自らの人生を否定することになる。信仰なくしては、ジャックは自らの存在理由を無くしてしまうのである。さらに、作品の設定上ジャックが〈罪〉を犯したという事を一番知られたくない相手は、〈私〉であっただろう。また、〈私〉がマリー・テレーズを凌辱する場面で注目したい言葉がある。

私が、今、凌辱し、汚すのはすべての処女、その処女の純白さ、無垢の幻影であった。男性は純潔の幻影を破壊するために存在するのだ。純潔の幻影のなかには、ジャックの十字架がかくれていた。基督者、革命家、マデニエのような人間が、未来に、歴史に抱く愚劣な夢想、陶酔が潜んでいた。

とあるように、〈私〉は、〈無垢の幻影〉、〈純潔の幻影〉と言っている。遠藤周作は、執拗に〈私〉に〈幻影〉という言葉を使わせている。それは、マリー・テレーズが純潔だということ自体が〈幻影〉であることを示唆しているのではないか。以上のように解釈すれば、ジャックの自殺は不可解なものでは無く、自己の信念の破綻からくる当然の行為だと言えよう。

ここで、〈私〉が手記を書いた理由に戻ってみる。〈私〉は、〈裡の拷問者〉を〈絶対〉に〈地上から消すこと〉が〈出来ない〉という〈事実〉を〈したためたい〉ために〈記録〉を書いた。また、Ⅰ章で〈私〉はこう述べる。

文化とか基督教とか、ヒューマニズムなどはなんの役にもたたない今日なのだ。ナチに限ったことではあるまい。連合軍であろうが、文明人であろうが、黄色人であろうが、人間はみな、そうなのだ。今日、虐殺される者は明日は虐殺者、拷問者に変わる。

〈私〉が〈記録〉を書く理由は、決して自責の念から来るものではない。寧ろ自己の論理が正しい事を強調している。〈基督教〉も〈なんの役にもたたない今日〉であり、〈人間はみな〉同じであると述べている。この箇所は、ジャックのことを指しているのではないか。〈虐殺されるものは明日は虐殺者、拷問者に変わる。〉とあるように、この言葉から、人間は立場が入れ替わる、少し飛躍すれば、今日神を信じるものは、明日は神を裏切るというジャックの行動をも連想できる。その背後には人間の表と裏を表現しようとした、作者遠藤周作の意識が窺える。

また、遠藤周作自身が、芥川賞受賞後の「感想」で述べていたように、「善と悪」という観念に関わってくるのではないだろうか。前述したとおりに、ジャックが神を裏切り、信念を貫き通せなかったことを〈私〉に知られたくなかったために、自殺したのだとしたら、この〈私〉の論理通りになっている。だからこそ〈私〉は、ジャックが自殺した事を知り、さらに、マリー・テレーズが〈純潔〉でない事にも気付き、〈(意味がない。意味がない)〉とつぶやいたのではないか。「近代文学」に発表された時点では、作品の主題と考えられる〈私〉の論理に筋が通っていた。しかし、「文芸春秋」以降、おそらく〈私〉の人物描写を曖昧にするための改稿であったのだろうが、大きな本文の削除により、作中人物の行動が不可解なものとなってしまったのではないかと考えられる。そのためにジャックの自殺は、理解不可能な行動として、たくさんの疑問を残してしまったのである。

(注)

(注1)「白い人」は、『白い人・黄色い人』(昭和30年12月20日、講談社)以後、以下の本に収録された。(発行日が明確になっていないものは、筆者未見。)

・〈芥川賞作家集2〉(1956年11月、修道社)
・新潮文庫『白い人・黄色い人』(1690年3月、新潮社)
・〈新鋭作家叢書6〉『遠藤周作集』(1960年8月、筑摩書房)
・〈新選現代日本文学全集33〉『戦後小説集(二)』(1960年11月15日、筑摩書房)
・〈昭和文学全集20〉『安岡章太郎・遠藤周作』(1962年9月、角川書店)
・〈芥川賞作品全集4〉(1963年8月1日、現代芸術社)
・〈新日本文学全集9〉『遠藤周作・小島信夫集』(1964年3月7日、集英社)
・〈現代の文学37〉『遠藤周作集』(1966年5月8日、河出書房新社)
・〈われらの文学10〉『福永武彦・遠藤周作』(1967年1月、講談社)
・〈新潮日本文学56〉『遠藤周作集』(1969年2月12日、新潮社)
・〈日本現代文学全集106〉『現代名作選(二)』(1969年6月、講談社)
・〈日本文学全集38〉『阿川弘之・安岡章太郎・吉行淳之助・小島信夫・庄野潤三・遠藤周作』(1969年10月、新潮社)
・〈カラー版日本文学全集51〉『安岡章太郎・吉行淳之助・遠藤周作』(1971年1月、河出書房)
・〈現代日本の文学45〉『安岡章太郎・遠藤周作』(1971年3月、学習研究社)
・〈現代の文学20〉『遠藤周作』(1971年9月22日、講談

社）

・講談社文庫『白い人・黄色い人　ほか二編』（1971年12月15日、講談社）

・『アデンまで』限定版（1973年7月、成瀬書房）

・潮文庫『日本の短編小説―昭和（下）』（1974年8月20日、潮出版社）

・新潮社版〈遠藤周作文学全集1〉『青い小さな葡萄・白い人』（1975年6月20日、新潮社）

・〈遠藤周作文庫A1〉『白い人・青い小さな葡萄』（1976年1月、講談社）

・〈現代日本文学32〉『庄野潤三・遠藤周作集』（1979年3月31日、筑摩書房）

・新潮社版〈遠藤周作文学全集6　短編小説〉（1999年10月10日、新潮社）

（注2）匿名「時の人」（「毎日新聞」昭和30年7月22日）が、〈評論家としての活躍の方が作家としてよりは目立っていた〉と述べ、「白い人」を書くに至った動機を、〈日本人が外国に行って感じる劣等感は彼を相当悩ませたらしい。それがこんどの「白い人」で人種問題を書かせることになったとみられる〉と語っている。また、高橋義孝が「意図と作品の差遠藤氏の白人小説について」（「毎日新聞」昭和30年8月2日）で、〈新しい小説を書こうとする時、問題はヨーロッパ的な霊と肉との相剋（そうこく）の解決および神の存在、非存在の追及にあ〉り、〈そういう問題が問題として成立しがたい日本との間にある距離を意識し、できればこれをちぢめたいと思って「白い人」を書いたというのである。〉と、遠藤周作が「白い人」を書いた意図について語っている。高橋義孝は、「白い人」の作品自体については、〈力作らしくおもしろかった〉が、〈読後紙芝居を見たように心に残るものがなかった〉と述べている。また、青野季吉は「文芸時評　新人による新風『白い人』―作者の実体つかめぬが」（「朝日新聞」昭和30年7月26日）で、

深刻なフランス映画でも見ているようなスキ間のある感じを抑えがたい。そういえばこのまま映画になりそうだ。変化に富み、計算をつくし、サディズムを軸とした刺激に満ちた作品だ。

と言い、

戦争が主人公だという言葉が作中に見えていたようだが、戦争下のフランス及びフフランス描いたものとしてみると、心臓のドキつくような紐部がすくなくなかった。

と、述べている。奥野健男は「目立つ〝戦後派〟再登場石川淳『落花』の若々しさ、見事さ」（「日本読書新聞」昭和30年8月29日）で、

木質的に戦後派に近い遠藤周作が芥川賞をもらったこ

とは、行きづまりの文壇に新風を吹きこんだ感じがするが、「白い人」（文芸春秋）の、類型的な人物設定が気になる。批評的実験小説の限界だろう。

と、創作の技術について批評している。杉森久秀は、「文芸時評　文運隆盛は目前に小説以上に小説的は感動『南氷洋』」（「図書新聞」昭和30年9月3日）で、

遠藤氏の芥川賞作品『白い人』（文芸春秋）も調子の高い文章で、若さがにおっている。材料がヨーロッパ人だから、この文体がよく似合うのではないかと思うが、日本人のことをこの文体で書いたら、キザなものになりはしないか。

と、述べている。また、匿名が「そろう長編小説の力作「古典と現代文学」評論での最大の収穫」（「日本読書新聞」昭和30年12月19日）で、

小島信夫の『島』も、その方法上の努力において強い注目にあたいするものであったが、その抽象的・象徴的方法は、伝統をもたぬ不毛な原野での実験だけに、運転中の作者へ話しかけるものもないかわりに、激励の声もうまくとどかなかったおもむきがある。芥川賞『白い人』の遠藤周作についても今後ほぼ同じようなことがおこるかもしれぬ。

と、語っている。

（注3）その記事は、「片手に安全な職業食えないで乱作よりは佳作をと」（「毎日新聞」昭和30年7月21日）という見出しで、

井上靖、堀田善衛、由紀しげ子のように受賞後すみやかに、第一線作家として活躍している人たちもあるけれど、受賞後数年で早くもカスンでしまう作家も少なくない。そのことも芥川賞が大きな夢を与えない理由ではないだろうか。また受賞しても、それまでの勤めをやめない作家がいるのは、芥川賞作家ということで、作家的地位が確立できるものでないことを物語っている。例えば、小谷剛、辻亮一、小島信夫、庄野潤三らは職業を手放さない。（中略）戦前第一回の石川達三から今度の遠藤周作で、三十五人の芥川賞作家が生まれたわけだが、現在活躍しているのは三分の一ぐらいといわれているのが現状である。

と、指摘している。

（注4）のち、遠藤周作は、『遠藤周作文学全集第一巻』（昭和50年6月20日、新潮社）で、〈その月の終わり〉を〈次の年の六月の終わり〉と訂正している。

（注5）武田友寿は、「『白い人』と『黄色い人』」（解説『白い人・黄色い人ほか二編』昭和46年12月15日、講談社）で、

「私」の論理によれば、《人間はやはり信じられぬ》もので、《人間は自己の肉体の苦痛の前にはやはり、すべての人類への友情、信義をも裏切る弱い、もろい

存在である》となるがゆえに、ジャックもやがて拷問の苦痛に耐えかねてマキの同志の名を告げるにちがいないと信じて疑わない。そのときジャックはみずから幻影を捨て、その論理を破ったことになるだろうし、それはあきらかに「私」の論理の勝利を意味することにもなるだろう。だが、ジャックは自殺を選び、同志への信義に生きぬいたのである。たしかに「私」はジャックの自殺を予測することはできなかった。「私」の精緻冷酷な論理をもってしてもジャックが自殺をあえてしてまで同志への信義を貫き通すということを考えることはできなかった。（中略）ジャックはたしかに同志への信義を貫いただろう。そのかぎりでいえばここには善の勝利があるといえる。しかしこの信義を貫くために彼は自殺を選ばなければならなかった。

と、解説している。

（注6）笠井秋生は、「『白い人』の世界」（『遠藤周作論』昭和62年1月25日、双文社出版）で、

マリー・テレーズが連行されてきた時、〈私〉は以下のような計算をする。〈ジャック〉はマリー・テレーズを見殺しにするか、同志を裏切るかのどちらかの道を選ぶ以外ないであろう。（中略）すなわち、マリー・テレーズは〈ジャック〉を助けるため自ら進んでその肉体を投げ出し、凌辱の役割を負わされてもいない〈私〉が彼女を犯してしまう。そして、〈ジャック〉はマリー・テレーズと同志を守るために舌を噛み切って自殺し、それを知ったマリー・テレーズは発狂する。これらはすべて〈私〉の計算外のことであった。（初出は「梅花短期大学研究紀要第28号」昭和54年12月25日）

と、述べている。

（注7）宮坂覺は、「アデンまで」『白い人・黄色い人』（『遠藤周作―その文学世界』平成9年12月13日、国研出版）で、

しかしここでも彼は勝たなかった。いかなる肉体的苦痛にも、彼は屈しなかった。卑怯にもジャックのまえで、マリーを責めて口を割らせることを考え、提案する。それは、大いなる〈実験〉であった。すなわち、マリーのために同志を裏切るか、裏切らなければマリーは凌辱されるであろう。（中略）しかし、〈私〉は負けた。神学生のジャックは、マリーを救うため自ら命を絶ったのである。

と、解釈している。

（注8）下野孝文は、『白い人論』―その背景と現実感―（『作品論　遠藤周作』平成13年1月20日、双文社出版）で、

同志を裏切ることなく、マリー・テレーズを守ろうとすれば、いずれにしてもその命を犠牲にする以外に方法はない。そのためにジャックは自殺という大罪をおかした。「私」の衝撃は大きい。それは、全く予測で

きなかった事態という以前に、「悪」の論理を覆すような何ものかを求めていた思いが絶たれたからである。

（中略）さらに、指摘すべきは、ジャックに罪をおかさせた、つまり、神学生という立場にありながら、みずからの意思を持って秩序の変容を行わせた点である。ともに、後の遠藤文学の展開に関わる大きな問題である。

と、指摘している。

（注9）舞踏会があった日の後、日付は明確にされていないが、

だから、モニックから、マリー・テレーズのその後の消息をきいた時、私は特に驚きもしなかった。

「まあ、知らなかったの。マリー・テレーズは、聖ベルナデッド会の修道院に寄宿しているわよ」

「ジャックの命令かい」

「でしょう。聖ベルナール教会に午後、五時に行ってごらんなさいよ。お二人が一緒に祈っているわよ」

皮肉な笑いを唇にうかべて、この当世風の娘は教えてくれた。

と、あるように、マリー・テレーズはジャックの家を出ている。二人の関係が以前と変わらないなら、同じように同居していてもいいはずである。舞踏会の前後で二人の関係に変化があることを証明している。ジャックは肉欲に負けないように、マリー・テレーズを自ら遠ざけたのではないか。ジャックは自分の性欲に負け、一度は肉欲の罪に陥ちたとしても、性欲には溺れなかったということになる。